

# 手元供養 サービス進化

大切な人の亡きがらの行きつく先は、骨つぼ、墓とは限らない。遺骨や遺灰の一部を加工して自宅に置いたり、装飾品にして身につけたりする手元供養が広がりを見せている。石やペンダント、中には合成ダイヤモンドや砂時計にまで、特殊な技術で遺骨を加工するサービスも出ている。

## 遺骨純度100%の石／合成ダイヤモンド／砂時計



①遺骨からつくられた「遺石」。骨の性質によって石の色は様々に変化する②遺骨からできた合成ダイヤモンド。こちらも白から深みのある青まで遺骨によって様々なアルゴダンザ・ジャパン提供



保管したが、最近では旅行に行くときもネックレスにしている。娘には自分の遺骨もダイヤモンドに、と頼んでいる。

## 被災地からも

サービスも多様性を増している。遺骨加工の草分け、02年創業のレイセキ(堺市)では、遺骨を使ったペンダントやプレスレット、数珠を製作する。東北の被災地からも4件の注文を受けた。石英の粉末と混ぜたペンダントは2、3割の遺骨があればいい。

東京都板橋区の「戸田葬祭サービス」が14年かけて開発した「遺石」。「遺骨純度100%の石」「遺石」をつくる炉です。世界で1台、ここにしかありません」と担当者。60℃の骨は真空の炉の中で約1500度の高温で溶かされ、冷やされ、結晶化する。この間、約3時間。手のひらで包めるほどの小さな「石」になった。石の色は、骨の成分によって白や灰色、青みがかったものにもなる。戒名などをレーザーで刻印すればできあがりだ。

価格は21万円。この2年で、約250件の注文を受けた。炉を共同開発した日本炉機工業(東京都)の村川英信社長は「遺骨以外の混ぜ物をしていない、100%にこだわりました。石は故人の遺骨そのもの。宗教も宗派も関係な

い。位牌や墓より、自然に手を合わせられると思う人が多いのでは」と話す。

遺骨や遺灰から合成ダイヤモンドをつくるサービスもある。スイスに本社のあるアルゴダンザ社の日本法人(静岡市)では、0.2割で約40万円、1割では約250万円。これまで全国から千件以上の注文があった。

遺骨は300℃必要。スイスの本社に送られた後、特殊な設備で炭素成分だけ取り出す。その後、熱を加えて黒鉛に変化させ、高温、高圧をかける。数週間後には、無色透明から深みのある青い合成ダイヤモンドとなる。製作期間は平均で半年間。完成品に外部の鑑別書をつけるなどしている。

## 依頼9割女性

日本法人社長の法月雅喜さんによると、依頼者の9割は女性。病气や事故で突然家族を失った人や、若くして親や夫、子を亡くした人が大半を占める。また墓や仏壇をもたない都市部の人が多いのも特徴的だ。残りの遺骨を散骨する人も増えているという。

販売業、土方八重子さん(63)は2006年3月、夫の健二さんをがんて亡くした。62歳だった。銀行マンとしてバリバリと仕事をこなし、医者に通ったことさえなかった夫の死。遺骨ダイヤモンドを知り、娘2人の分も合わせて、三つ作ってもらった。

「お墓に入ってしまうのは、1年に数回お参りに行くだけ。ダイヤモンドなら、いつでも近くに置いておけると思いました」と土方さん。紛失するのが怖くて、最初は大事に

(斎藤健一郎)



戸田葬祭サービスなどが14年かけて開発した「遺石炉」―東京都板橋区

横浜市青葉区の手芸品輸入